研究ノート

「リヒトホーフェン日本滞在記から学んだこと」

－日本像と日本人像を中心に－

久保田　武[1]

１．この小論の意義と目的

（１）幕末から明治初期にかけて来日した欧米人の日本訪問記録

ペリー提督とハリス公使の働きで締結された 1854 年の日米和親条約と 1858 年の日米修好通商条約締結の結果、日本は 210 年以上続いた鎖国[1)] に終止符を打ち、世界に門戸を開いた。その結果西欧世界に日本ブームが巻き起こり、欧米の主要国から続々と使節団や艦隊が来日し、数多くの遠征記・滞在記・旅行記が書かれた[2)]。その中には和訳され今日まで広く読まれている文献も多い。また日本人によるこれら欧米人の手記や生涯を紹介する本[3)] もある。なかには和訳された欧米人の主な文献をまとめて紹介する便利な本[4)] も出版されている。

（２）この小論の意義と目的

その中にあって、本稿で紹介する上村直己訳「リヒトホーフェン日本滞在記」（九州大学出版会 2013）は、日本語版の登場が新しく、厚いドイツ語の原書を読めるごく少数の専門家を除きあまり知られてこなかった。またシルクロードの命名者として特に歴史・地理研究者の間で知られるリヒトホーフェンのような傑出した地質学・地理学・地域研究の学者の日本紹介書は、同時代の他の著書の中では異色である。米英蘭仏独露諸国などから来日し著書を残した人々の多くは。外交官、海軍軍人、宣教師などであった。筆者が本書を紹介する意義と目的はそこにある。以下、彼が日本滞在と旅行中に得た日本像と日本人像に焦点を当てて紹介する。150～140 年前の私たちの祖先の言動と日本の姿から、今日の日本の国内問題・国際関係を考え判断するうえで、有用な参考資料が数多く含まれていると筆者は考えている。この小論の最大の意義と目的もそこにある。

なお本書の第一部は 1860 年 9 月から 61 年 2 月までの滞在日記で、江戸と横浜から 10 乃至 12 マイルを超える行動は許されなかった。しかし第二部は 10 年後の 1870 年 9 月から 71 年 3 月までの旅行日記であり、行動範囲は遥かに広い。富士登山を皮切りに、甲州―諏訪―木曽谷―瀬戸―名古屋―大津―大阪---海路---長崎―雲仙―天草―鹿児島―霧島―熊本―佐賀―有田―長崎という大旅

1　日本教育大学院大学 学校教育研究科

行であった。当時日本の主要街道であった中山道も歩いている。主に乗馬の旅だったが、一部は駕篭、馬車、徒歩も使ったようである。

２．先行文献とリヒトホーフェン（1833～1905）の略歴、翻訳書紹介

（１）先行文献

まず、西川治「フェルディナンド・フォン・リヒトホーフェンとその日本滞在記」（古今書院　雑誌『地理』第 13 巻第 3 号 p48―52 1988）があげられる。本論文（２）で紹介する彼の略歴と業績はそこから抜粋の上紹介したものである。

次に、上村直己「リヒトホーフェンの見た幕末・明初の九州」（熊本大学文学部論叢第 56 号 1997.3）をあげる。この論文は、「リヒトホーフェン日本滞在記」の翻訳を完成した上村博士（熊本大学名誉教授・熊本学園大学講師）が執筆者で、第 2 回来日時リヒトホーフェンが訪れた九州の部分の日記から抜粋紹介した部分が大半を占めているが、第 1 回来日時の日記にも若干触れている。注目すべきは第 1 回滞在中に江戸で暗殺されたヒュースケン（後出）に言及している点である。

新しいところでは、佐々木博（筑波大學名誉教授）が地理学評論 87 巻－3 号（2014 年 5 月）に本書の書評を書いている。佐々木も西川同様ボン大学留学生であった。内容は本稿と西川治の本稿へのコメントと大部分が重複しているが、プロイセン使節団長オイレンブルク伯のシーボルト評とその息子と日本の関わりを紹介、次いでリヒトホーフェンとイザベラ・バードの旅行を簡単に比較している。

その他のリヒトホーフェンの日本滞在に関連する文献一覧

グスタフ・シュピース「シュピースのプロシア日本遠征記」（小沢敏夫訳注 奥川書房 1934）

「第 1 回独逸遣日使節日本滞在記」（日独文化協会訳 1940）－団長兼特命全権大使オイレンブルク伯の書簡

フォン・ブラント「黎明日本」（日独文化協会訳 刀江書院 1942）

望月勝海・佐藤晴生訳「リヒトホーフェン支那（１）－支那と中央アジア」（岩波書店 1942）

「オイレンブルク日本遠征記 上下」（中井晶夫訳－使節団公式記録（雄松堂出版 1961）

ラインホルト・ヴェルナー「エルベ号艦長幕末記」（金森誠也・安藤勉訳 新人物往来社 1990）

以上の先行文献は、西川治と上村直己両先生の教示による。

（２）リヒトホーフェンの略歴と業績

彼は 1833 年、シュレジェン（第 2 次世界大戦後ポーランド領に編入されシロンスクと改称）のカールスルーエで生まれた。1850 年ブレスラヴ（現ヴロツワフ）で大学入学，1852 年ベルリン大学へ転学、物理・地質・鉱物・地理を学び 1856 年卒業した。その後の研究調査活動が認められ、1860 年

プロイセンの通商使節団に加えられ、日本滞在記の前半を書く機会を得た（1860 年 9 月～1861 年 2 月）。当時まだ弱冠 27～28 歳の青年であった。来日途中に東南アジアに立ち寄っている。ちなみにプロイセン使節団は来日使命目的を果たし、1861 年 1 月 24 日日本との通商条約を調印した（詳細は上村の訳文 p110 参照）。日本から帰国後の彼は、1863 年から 68 年までカリフォルニアで調査研究の際、金脈の発見に貢献し、次のシナ大陸の奥地を含む調査大旅行（1868-72）の資金援助を得るきっかけになった。この成果は、彼の死後 5 巻の大著にまとめられた。中国研究旅行の副産物として、膠州湾の優れた地の利を宰相ビスマルクに指摘し、三国干渉後ドイツの同地租借に貢献している。また日本滞在記の第二部（後半）は（1870 年 9 月～1871 年 3 月）、中国の動乱（直接には義和団事件）のため 1870 年 6 月に中国の調査旅行を中断来日した期間の旅行見聞を日記にまとめたものである。時に彼は 37～38 歳、研究調査の実績を積んだ少壮の学者・専門家に成長していた。富士登山に挑戦する体力も十分に温存していた年齢である。中国の調査研究から帰国後の彼は、ボン大学、ライプチヒ大学、ベルリン大学教授を経て 1903 年にはベルリン大学総長に就任した。その間ベルリン地理学協会長、国際地理学会議会長を務め、1905 年 72 歳で充実した生涯を終えた。

（３）優れた先輩と後輩の学縁

最初に学んだブレスラウ大学の化学者ブンゼンの講義に感銘し、ベルリン大学生時代には高名な地理学者カール・リッターに接している。

リヒトホーフェンの影響を受けた学者、探検家は多い。なかでも中央アジアの大探検家スウェン・ヘディンはその最右翼であろう。リヒトホーフェンの死後ベルリン大学教授の後任になったペンクもライプチヒ大学以来この先輩の影響を受けてきた地理学者であった。日本地理学会および東京大学地理学教室創立者の山崎直方教授はペンクに師事している。

（４）この翻訳書について

まず長文のドイツ語原書の翻訳を、大学での公務の傍ら短くない年月をかけて完成された上村直己熊本大学名誉教授に、心から敬意と尊敬の気持ちを表わしたい。

翻訳文はおおむね読みやすくこなれた文章で書かれている。数多く出てくる岩石・鉱物・地質・地形関係の術語も正確である。圧巻は、第一部と第二部のそれぞれ文末に置かれた脚注である。大変詳しく、訳者による原著者の誤りの訂正や追記も労を厭わず丹念に行われ、読者の理解を大いに助けている。

図 1　1860-61 年の間にオイレンブルク使節団が訪れた江戸とその近辺、および図 4 第二部旅行ルート概略図、図 5 九州旅行ルート概略図は、読書を大いに助けてくれる有用な資料である。特に図 1 は、セバスティアン・ドブソン＆スヴェン・サーラ編「プロイセン・ドイツが観た幕末日本」から引用した図で、訳者がリヒトホーフェンの著書以外の関係資料を丹念に参照したことを物語っている。

３．日本滞在記に見るリヒトホーフェンの日本像と日本人像

（１）概観

最初に本書の内容を概観する。次に（２）～（７）で、筆者が焦点化した日本像と日本人像のテーマごとに「引用文」を掲げ、それに続けて筆者のコメントを添えて紹介する。

第一部は 1860 年 9 月から翌 1861 年 2 月までをリヒトホーフェンが日記にまとめたものである。欧米の有力国に遅れること 2 年、ドイツ統一に先立つこと 10 年前、ドイツ連邦構成国中最有力のプロイセン（プロシア）が、日本との通商条約締結を求め、特命全権公使オイレンブルク伯爵を団長に、アルコーナ号、テーティス号他 2 隻（計 4 隻）からなる艦隊を編成しで来日し、5 ヶ月後目的を達成、帰国した。なお中国、タイとも同様の条約締結を使命としていた。遠征隊の中で海軍以外の参加者については、本書の翻訳者上村直己博士の前掲論文（p57）に詳しい。リヒトホーフェンは、地質学担当自然科学者として参加している。自然科学者としては、他に植物学、動物学、農学担当の専門家が参加した。

彼の日記は 9 月 1 日、伊豆半島沖で台風に翻弄される船上描写で始まり、次いで台風一過とともに、海上から富士山を望んだ印象を、「私はこの気高い円錐状の山以上の雄大な山を見たことがなかった。」（p11）と書いている。10 年後の再日に際しては富士登頂に成功し念願を果たした。そのときの記録は第二部本文 p148～151 に詳しい。

2 回目の来日では、その他に霧島、雲仙も登頂した。ただ強い希望を持ちながら、阿蘇、桜島、開聞岳は日程が許さないこともあって断念した。

彼の日記の第一の特徴は、気象、地形、地質、岩石、植生、地理的位置、道路、景観などの描写に詳しいことである。彼が足跡を残した日本各地の当時の様子がよく分かる。研究者・専門家として実績をあげてから 10 年後に旅行した際には、各地で鉱物鑑定などを求められ指導している。例えば鹿児島では錫鉱山と工場、熊本では炭鉱で専門的な助言をした。

二番目の特徴は、子供を含む住民の住居と服装、言動、白人への接し方、商売・生業の観察と描写に詳しいことである。その主なものは、紙面が許す限り（２）以下で取り上げた。割愛した例をあげると、芸妓と遊女、性道徳の違い、女性の地位と暮らし、役人のモラール、宗教観、地域による気質と貧富の差、宿泊施設の様子などである。時間があれば、これらも含めた日本像・日本人像を、他の日本訪問者の記録と合わせ総合的にまとめてみたい。

ところで、第一回の滞在が始まった 1860 年は、桜田門外で井伊直弼が暗殺され、攘夷派が勢力を伸ばしてきた時期であった。日本の状況に疎いプロイセン使節団のコーチ兼案内者として助けたアメリカ公使館のヒュースケン（オランダ人）が 1861 年 1 月 15 日夜攘夷派に暗殺された。暗殺直後の彼の遺体の様子と日本駐在欧米人社会に与えた衝撃は、悲痛な気持ちを抑えつつ生々しく記述されている（p101～107）。彼が離日した翌年（1862 年）には生麦事件が起こり、攘夷運動は更に盛り上がった。その後薩英戦争、連合艦隊の下関砲撃によって、攘夷運動は退潮に向かった。

（２）日本人の物づくりの才能から国家機構まで－1860 年 9 月 11 日　江戸

「いろいろな商人たちが集まってきて、われわれの宿舎の廊下に陶磁器、漆器、象牙彫り、青銅製品などの店を出し、飛ぶような売れ行きであった。品物は安くはなかったが、値段相応であった。この国民の産業は驚嘆すべきものがある。市場を歩いて、店々が軒を連ねているのを見、またそれらのどの店にも驚くほど多様な日常生活の必需品にあふれ、ヨーロッパでは多くの方面で達成されていない完成度にあるのを見ると、完全に孤立し外界との交流のない国民がこれらすべてを生産し、様々な方面でそのような高みに発展することがどうして可能であったのか、それを理解するのは困難である。それは平和であったことに関係があるのは確かであろう。日本人は千年の間ほとんど何物にも妨げられないで生活してきたのである。ヨーロッパ諸国民の場合そのような時代に芸術と科学を好む傾向が目覚めたが、ここではどうやら内面的、有機的発展と、無言の勤勉な労働を好む傾向が生まれた。それ自体巨大な産業（巨大建築、機械製作など）は欠けているようであるが、小さいもの、微細なものを恐らく到達しうる最も素晴らしく、最も完全なものに発展させた。個々人の回りくどい性格、最も正確かつ最も微細に整えられた国家機構、完全に自立した、国家のために生きる、皆に承認された構成員を生みだした完全に有機的に発展した諜報システム、また内政と警察の見事に構成された制度、これらと、小規模の産業、いわば座って行う産業の完璧さ、例えば家の隅々まで手入れする入念さとは完全に一致する。」[5)]

（筆者コメント）

この部分を読んで直ぐに頭に浮かんだことは、「ペルリ遠征記（四）」（岩波文庫 1955 p127～128）である。彼は日本の手工業者の技術を称賛した後で、「日本人が一度文明世界の過去及び現在の技能を所有したならば、強力な競争者として、将来の機械工業の成功を目指す競争に加わるだろう。」[6)]と予言している。

ペルリの予言には及ばないものの、弱冠 27 歳の青年地質学者が、広く世界を見聞している大提督ペルリも関連付けなかった日本の政治機構との関係に言及しているのは、彼が卓越した観察力、推理力の持ち主である証のように思える。

（３）美しい家並みと好感が持てる子供達－1860 年 9 月 30 日、横浜近郊

「家々はどこも清潔で、感じが良く、周囲を垣根や刈り込まれた生垣に囲まれていて、さらに大抵小さな庭がついている。家の内部は活気がある。皆大家族で、家事労働に従事していない住人のいる家などほとんど見当たらぬ。子供たちや少女たちはどこにもいて、少女たちが忍び声で、お早う、と答えると、子供たちは群れをなして追いかけてきて、あなたお早う、と叫ぶ。植物や動物の採集の際は子供たちがやってきて、しばしばすばらしい手伝いをする。特に 8～10 歳の少年と、利発で聡明な若者がそうで、彼らは何をしたらいいかすぐに理解し、進んで手伝う。全員が好奇心は強いが、不愉快ではない。押しの強さの中にも彼らは礼儀と控えめの態度を守っており、我々の植物及び動物採集を興味と理解力を以て観察している。そのような場合ヨーロッパ・アルプスやその

他の地方ではしばしばつっけんどんに追い返すことが必要であるが、ここでそうすることは適当でないし、その必要性を感じることはない。」[6)]

（筆者コメント）

横浜から保土ヶ谷にかけて、主に東海道沿いに戸塚の入り口まで散策したときの日記から抜粋した文である。当時外国人は居留地から 10～12 マイルまでしか離れることが許されなかった。その後第二回滞在記を含め、各地で子供と住民、家屋・集落の観察記録が散見されるが、おおむね似たような好感に満ちた描写が多い。少なくとも主要街道沿いの集落や町では、かなり一般的と考えてよいと思われる。江戸時代の日本人の寺子屋と家庭教育を封建的と一概に決め付けるのではなく、その背景と、今日の教育に生かす手立てを考える必要があるように思う。当時の庶民の生活についてもマルクス史観に偏り、搾取、貧困、差別など暗い側面を強調しすぎるのは、大局観に欠けた見方のように思える。

（４）整備されている東海道－1860 年 9 月 30 日　横浜－保土ヶ谷----戸塚

「保土ヶ谷は非常に長い村であって、馬で通過するのに 20 分くらいかかる。多くの商人たちがいて、特に大きな茶屋がたくさんあったが、そこは建物の広大さと全体の施設、内部の家具調度の点で品川のそれに似ている。その多くは同時にこの街道を旅する多数の旅行者のための宿泊所となっているようである。それはこの国の主要街道だそうだ。とても幅広いので、馬車は快適に進み、すれ違うことができるが、いずれにせよ、現代のヨーロッパの街路とは等価値のものではない。とっくの以前に始まった、古い砕石敷を用いた路盤は我が国の舗装道路を想起させるが、平らになるように配慮されてはいない。道の両側には水を流す溝があり、日本橋を起点に計算されたマイル里程標が短い間隔で次々に置かれている。」[7)]

（筆者コメント）

リヒトホーフェンが、横浜郊外保土ヶ谷から箱根駅伝の難所、権田坂を登り戸塚村との境までの東海道を観察した記述と推定できる。街村と宿場町の発達、そして道路の整備が進んでいたことは、第二回滞在で歩いた中山道や九州の街道でも指摘している。この街道には堂々とした松並木（彼は針葉樹と表記）が続き、人馬、駕籠の往来が盛んで活気があり、茶屋娘たちの呼び込みと茶菓の接待にも触れている。このような街村は高度成長期以前まで主要街道に沿って残されていた事実は、国土地理院発行地形図から読みとれる。

（５）日本人像と中国人像Ｉ－1870 年 12 月 24 日　甲府－築山

「どの村でも住民の半数が次の村までそれに加わった。それらの人々の好奇心が現れている無邪気でおとなしい性質と、中国人の声高で、押し付けがましく、ぶしつけな態度との対比はとても愉快だ。ここではほとんど一言も発せられず、決して不快な言葉は語られないし誰も押しつけがましくない。皆が恭しく、距離を置いている。人々は清潔で、一般に身なりが良く、中国人のように嗅

覚を不快に刺激しない。子供達の場合、特に目下寒い冬で鼻拭きの使用不足が目立って少し不愉快であるが、ドイツの山村よりもその数は多くはない。」[8)]

（筆者コメント）

中国調査の合間に訪日した旅行だけに中国（人）と日本（人）の比較が参考になる。

甲府から諏訪へ向かう地方の街道でも横浜近郊の東海道とその周辺で観察された日本人の相手の気持ちを配慮し、控え目で、礼儀をわきまえた白人への接し方は、子供でも基本的に変わらない。清潔という印象も地方の農村でも同じである。中国人の自己主張を振りかざす生き方と比べ、彼がどちらに好感を抱いたか明らかである。この違いの由来は興味ある研究課題であるし、また現在に生かす手立てを考える必要がある。日中対立の構図にも 140 年以上前の両民族の気質の違いが尾を引いていると筆者は感じている。

（６）日本人像と中国人像Ⅱ　1871 年 1 月 3 日　多治見

「そもそも日本ほど粗野な行動に出会うことの少ない国はないだろう。これまで旅の途中で人間が殴り合うのを見たことがないし、喧嘩しているのを聞いたこともない。子供が殴るのを見たことはないし、また一人としてぶしつけに叫び声をあげるのを聞いたこともない。私の苦力たちはいつも機嫌が良く、冗談を言い、笑い、不平を言わず、荷物の重量の不平等な配分に苦情を訴えない。通常彼らはくじを引き、どういう決定が下されても満足している。これまで彼らまたはその他誰でもチップを要求したことはなかった。中国では、通常の生活で一日のうち聞かれるすべての会話の 10 分の 3 はお金の話である。ここでは精算の際ですら私がそのことについて話さなければその語が話されるのを聞くことは殆どない。私の苦力たちはお金について語らないし、中国ではそのこと以外は語らない。」[9)]

（筆者コメント）

それまで異民族の占領・支配を受けず、特に最後の 200 年余は国内で平和が続き、自給自足的生活を送ってきた日本と、その対極にあった中国で、金銭感覚が違うのは当然として、中国商人、日本職人の気質の違いは現在も生き続けている。その背景は興味深い研究課題であるし、現在の両国を較べるときに、また日本人の将来の生き方を考えるために、避けては通れない問題のように筆者は思う。

（７）都市の比較（江戸、大阪、鹿児島、佐賀）

江戸（1861 年 1 月 31 日付両親への手紙から抜粋）

「（前略）江戸の周辺ほど高度な魅力を有する都市はなかろうと思えるからです。私たちは毎日うっとりしてそれを眺め、毎日景観の豊富さに驚嘆しています。いつも昨日に勝る新しい発見があります。江戸の周囲と遠くの山麓まで低地の平らな丘陵地が広がっていて、そこには無数の小さな谷と山峡によって窪地が造られています。唯一の平野は大川に沿って丘陵地へ消えています。江戸

は一部がこの平野にあり、一部は丘陵地が平野に変わるところに位置しています。前者には商業及び織物業に従事している人々の密集した家々があります。小さな高台には、宮殿、寺院、庭園があります。（中略）-----

活動的で勤勉な国民が散文的な感覚を持っていたら、国全体は大きな菜園のように見えたでしょう。だが日本人は世界の他の民族にはほとんど見られないような、自然に対してすぐれた理解と愛情を持っており、それと私たちには余りに蟠事と思われるような純粋で高貴な趣味を調和させているのです。前者の例は、江戸の 28 万戸の家々には心をこめて手入れされていない庭のある家など 1 軒もないということに見られます。」（後略）[10)]

大阪（1871 年 1 月 12 日）

「桟橋やロープのような設備は存在せず、至るところ醜悪な家の裏側が岸に向いているのが中国と日本の川沿いにある町の特徴だ。天津のひどい町を思い出して欲しい。それでも大阪の川はどうみても美しい光景とは言えない。その川は似たような性格の中国の商業都市に較べて活気がない。川は間もなく鋭角に二つの部分に分かれる。細長い島には大名屋敷があり、そこでは非常に多量の米が荷下ろしされていた。（後略）」[11)]

鹿児島（1870 年 12 月 7 日～12 月 15 日）

「伊集院から鹿児島へ向かう最後の凝灰岩台地の下り坂は急であるが､風景の美しさは一層増す。即ち木材運搬用道路の両側に見られる植生の豊かさにまず魅了されたし、次いで鹿児島湾と美の極致桜島の火山の眺めであり、あるいはよく世話の行き届いた住民の住宅であったりした。私には鹿児島は日本で最も美しい街に見える。」[12)]

佐賀（1871 年 2 月 28 日）

「肥前の藩主の居城のある佐賀は大きな美しい町である。一巡するのにまる 1 時間かかった。道は広く、家はしっかりした作りである。すべて清潔で、きちんとしている。私が日本で見た最も美しい商業町である。というのは鹿児島のよく整備された市街区は公的な居住地から成っているのであって、商業町としては佐賀には遥かに及ばない。多くの上品な店があり、特に菓子類や薬の店、古美術商がそうであり、欧州産品の在庫も豊富である。人々は立派な身なりをしている。」[13)]

（筆者コメント）

リヒトホーフェンは江戸の都市造りと住民を評価し、かつ気に入っている。現在の港区にあった赤羽根の接遇所と横浜を拠点にして 1860 年 9 月から 1861 年 2 月まで、江戸市内では増上寺、寛永寺、浅草寺他を公務の間に訪問した。記述の中で丘陵、山峡、平野という表現があるが、この場合正しくは（沖積）平野または低地、（洪積）台地、開析谷とするのが適当であるので指摘しておく。また庭園には武家屋敷も含まれているように思われる。

大阪の港周辺は彼にとって中国の天津同様不評であった。鹿児島と佐賀はそれぞれ異なった特徴を持つ街として高い評価を受けている。少なくとも彼が訪問した日本の街のなかでは。

４．まとめ－リヒトホーフェン日本滞在記から学んだこと

最初に、リヒトホーフェンが、終始自分が観察した事実に即して考え、判断し、記述している姿勢を高く評価したい。

幕末から明治初期に生きた私たちの祖先は、リヒトホーフェンの言葉を借りれば、長年外の世界から孤立しながら、自力で立派な国造り、都市造り、村造り、家造りをしてきた。また彼が賞賛した美しい日本の自然を生活舞台にして、勤勉で好奇心に富み、穏やかで礼儀正しく、清潔好きで控えめ、そして相手に気配りをする親切な国民性を育んだ様子は、物づくりの精緻な技術とともに彼を驚嘆させた。彼は、中国人と日本人を比較して、明らかに日本人により強い好感を寄せた。現在の私たちには、140～150 年前の祖先が持っていた数々の美点が、金銭では計れないプラスの遺産として代々伝えられ、日本が工業とサービス産業で世界のトップランナーとなった原動力として今日まで生き続けている。また日本の安定した社会運営と治安の良い環境形成にも大きく貢献した。しかし工夫と努力の継続なしに先祖の遺産を継承・発展することは難しい。この事実を自覚し、祖先の遺産を次の世代に引き継がなければならない。

昨今、中国漁船団が大挙小笠原や伊豆南部の日本の排他的経済水域や時には領海に侵入して金儲けのため貴重な珊瑚を採取する荒っぽい行動を聞くと、本稿（５）（６）「日本人像と中国人像」で、リヒトホーフェンが述べた中国人像が、140 年後の今でも当てはまるように思われる。小笠原だけでなく、南シナ海でベトナムやフィリピンを含む近隣諸国に対する中国の自国の利益追求をむき出しにする行動も根源は過去から受け継がれている負の遺産（民族性）。日本の対応も歯がゆいが、中国の将来のためにも不幸なことと筆者は思う。

ところで、リヒトホーフェンは日本人の長所を多面的に認めているが、長所と短所は表裏一体。私たちは、短所も自覚し、それによって生じる弊害をできるだけ少なくするよう心がけることが必要だ。例えば、精緻な手工業品作りや他人への気配りを得意とした祖先の性向は、細かい点まで完璧主義を追求しすぎるあまり、局部にこだわり、大局的判断を苦手とする傾向がある。また島国と鎖国は、日本人の間に内向き思考を強くした。明治以後、大事なところで大局的判断を誤り、一時の成功に国際協調の重要性を忘れ、自信過剰となって暴走し、国を存亡の危機に陥れ、大勢の国民の命を犠牲にしたのはマイナスに働いた一例ではなかろうか。

敗戦後、米国占領軍の強力な指導によって平和な民主国家に変身したが、細かいことで外交・政治・経済・社会問題の議論が本筋からそれることが多く、また必要以上に煩雑な規制を張り巡らせて自ら暮らしにくくしている事例が見られる。外交面では、いつまでも戦争責任をはっきりと謝罪せず、従軍慰安婦や南京事件ともども、日本の常識世界の非常識の状況を世界に広げている。国内問題でも水俣公害は 50 年たってもまだ解決できない。当然のことながら外国語は苦手である。アバ

ウトに勉強出来ない、させられないのである。日本の将来をより良くするために、リヒトホーフェンが見た日本像と日本人像から学ぶことは多い[14)]。幕末明治初期に来日した彼以外の多数の欧米人も、程度の差こそあれ、似たような日本（人）像を書いている人が多いのである。

謝辞

まずこの本を筆者に贈って下さった西川治先生（東京大学名誉教授）に心から御礼申し上げる。先生を通じてこの本を知らなければ、この小論は書けなかった。また先生は先行文献として先生ご自身がお書きになったリヒトホーフェンを紹介した文献を送って下さった。重ねて御礼申し上げる。

次にこの本を翻訳された上村直己先生（熊本大学名誉教授）に御礼申し上げたい。上村先生は、A5 版 236 ページになる厚い翻訳書を長年かけて完成された。行き届いた訳註と読みやすい訳文のおかげで、この小論を書くことができた。さらにご自分が書かれた関連論文（前掲）の抜き刷りを筆者に送って下さった。重ねて御礼申し上げる次第である。

また上村先生（前掲）と森泉先生（慶応大学教授）には、表題のドイツ語について、誤植と表記方法についてご指摘と助言を頂戴した。この紙面を借りて感謝の気持ちを表したい。

註

1）　オランダ船と明船との交易を長崎に限ったのが 1641 年、ポルトガル船来航禁止が 1639 年、日本人の海外渡航と海外からの帰国を禁止したのが 1635 年である。

2）　国別に日本語版がある主な文献をあげると

アメリカ人

ペルリ提督「日本遠征記　全 4 巻」（岩波文庫 1948）

ハリス「日本滞在記　全 3 巻」（岩波文庫 1954）

マクドナルド「日本回想記－インディアンの見た幕末の日本」（刀水書房 1979）

S・W・ウィリアムズ「ペリー日本遠征随行記」（雄松堂出版 1985）

オズボーン「日本への航海」（雄松堂出版 2002）

スポルディング「日本遠征記」（雄松堂出版 2007）

イギリス人

アーネスト・サトウ「一外交官の見た明治維新　全 2 巻」（岩波文庫 1960）

アーネスト・サトウ「遠い崖　全 14 巻」（朝日新聞社 2007-2008）

オールコック「大君の都－幕末日本滞在記　全 3 巻」（岩波文庫 1962）

オリファント「エルギン卿遣日使節録」（雄松堂出版 1968）

F・V・ディキンズ「パークス伝－日本駐在の日々」（平凡社 1984）

R. フォーチュン「幕末日本探訪記　江戸と北京」（講談社学術文庫 1997）

A・B・ミッドフォード「英国外交官の見た幕末維新―リーズディル卿回想録」（講談社学術文庫 1998）

イザベラ・バード「日本奥地紀行」（高梨謙吉訳註　平凡社 2000）

同上「完訳日本奥地紀行」全 4 巻（金坂清則訳注　平凡社 2012）

同上「新訳日本奥地紀行」（金坂清則訳注　平凡社 2013）

上記のイザベラ・バードの訳注書 3 冊中最も詳しいのは完訳日本奥地紀行である。

鈴木健夫／ポール・スノードン／ギュンター・ツォーベル「ヨーロッパ人の見た幕末使節団」（講談社学術文庫 2008）：1862 年（文久 2 年）欧州に派遣された幕府使節団への現地人（英国・独逸・露西亜）の印象

フランス人

エドゥアルド・スエンソン「江戸幕末滞在記―若き海軍士官が見た日本」（講談社学術文庫 2003）

オランダ人

カッテンディーケ「長崎海軍伝習所の日々」（平凡社 1964）

シーボルト「江戸参府紀行」（平凡社 1967）

「ボンベ日本滞在見聞記―日本における 5 年間」（雄松堂出版 1968）

シーボルト 岩生成一監修「日本」（厳松堂 1977~1979）

日独文化協会編「シーボルト研究」（名著刊行会復刻版 1979　初版岩波書店 1938）

A・シーボルト「シーボルト最後の日本旅行」（平凡社 1981）

A. ボードウァン「オランダ領事の幕末維新」（新人物往来社 1987）

「ヒュースケン日本日記」（岩波文庫 1989）

ドンケル＝クルチウス「幕末出島未公開文書―ドンケル＝クルチウス覚書」（新人物往来社 1992）

「シーボルトの見たニッポン」（シーボルト記念館）

ロシア人

ゴンチャロフ「日本渡航記」（岩波文庫 1941）

ゴロヴニン「日本幽囚記 全 3 冊」（岩波文庫 1943・1946）

メーチニコフ「亡命ロシア人の見た明治維新」（講談社学術文庫 1982）

ゴロヴニン「ロシア士官の見た徳川日本－続日本俘虜実記」（講談社学術文庫 1985）

ドイツ人

グスタフ・シュピース「シュピースのプロシア日本遠征記」（奥村書房 1934）

「第 1 回独逸遣日使節日本滞在記」－オイレンブルグ伯の書簡（日独文化協会訳 1940）

リヒトとホーフェン「支那(1)－支那と中央アジア」（岩波書店 1942）

フォン・ブラント「黎明日本」（刀江書房 1942）

「オイレンブルグ 日本遠征記 全 2 冊」（雄松堂出版 1961）

M・v・ブラント「ドイツ公使の見た明治維新」（新人物往来社 1987）

ラインホルト・ウェーゲナー「エルベ号艦長幕末記」（新人物往来社 1990）

シュリーマン「シュリーマン旅行記 清国・日本」（講談社学術文庫 1998）

スイス人

エメ・アンベール「幕末日本図絵 全 2 巻」（雄松堂出版 1969、1970）

R・リンダウ「スイス領事の見た幕末維新」（新人物往来社 1986）

エメ・アンベール「絵で見る幕末日本」（講談社学術文庫 2006）

イタリア人

V・F・アルミニヨン「イタリア使節の幕末見聞記」（新人物往来社 1987）

付記：上記の出版社中、「雄松堂出版」は合併で現在「雄松堂書店」になり、

「新人物往来社」は、現在「KADOKAWA 中経出版グランドカンパニ」に吸収合併されている。

3） 宮本常一「イザベラ・バードの旅『日本奥地紀行を読む』」（講談社学術文庫 2014）

4） 川合章子「ダイジェストでわかる外国人が見た幕末日本」（講談社 2011）

5）　リヒトホーフェン「日本滞在記」p26　9 月 11 日（火）書名は以下「日本滞在記」と表記。
6）　同上「日本滞在記」p40～41
7）　同上「日本滞在記」p42
8）　同上「日本滞在記」p161
9）　同上「日本滞在記」P170~171
10）同上「日本滞在記」p114～116
11）同上「日本滞在記」p181
12）同上「日本滞在記」p194
13）同上「日本滞在記」p222
14）特に、「日本ほど粗野な行動に出会うことが少ない国はないだろう」（日本滞在記 p170）と私たちの祖先を称賛したリヒトホーフェンの言葉を、今日の私たちが裏切らないよう自覚し行動することが大切である、と筆者は痛感する。

久保田　武　研究ノート：「リヒトホーフェン日本滞在記から学んだこと」 へのコメント

西川　治（東京大学　名誉教授）

リヒトホーフェンは、ボン大学地理学教室の創始者、後にベルリン大学総長、国際地理学会議会長などを務めた大学者である。『シナ、独自の旅行とそれに基づく諸研究の成果』(5 巻、1877～1911、ベルリン、1960 年代に復刻版）は、彼の不朽の名著である。ベルリン大学時代の弟子で、中央アジアの科学的探検で有名なスウェン・ヘディンは、大僧正のような威厳と温容を湛えた師匠を科学界の王侯と礼賛している（『リヒトホーヘン』高山洋吉訳 慶応書房 1941）。

A. フンボルトの親友、C. リッターが創立したベルリン地理学協会は、会長だったリヒトホーフェンの生誕 150 年を記念して、1983 年 10 月 5～8 日、ベルリンの国立図書館において彼のシンポジウムを挙行し、季刊誌 114 巻 2－3 号（1983）に、Albert Kolb（地理学者、元ハンブルク大学総長）の「シナの研究者と教師としてのドイツ地理学者」、Alfred Schinz（ベルリン大学）による「リヒトホーフェンの旅行以後における西安市の発展」などの論文が掲載された。

評者が東京帝国大学理学部地理学科に入学したのは大戦末期の昭和 19 年（1944 年）10 月である。折しもその頃、前掲大著の前半一部の和訳書、望月勝海・佐藤晴生訳『支那（1）－支那と中央アジア』（岩波書店 1942）と、能登志雄訳『支那（5）－西南支那』（岩波書店 1943）が相次いで出版された。1960 年頃にこの不朽の大著が復刊されたときには、早速東大駒場キャンパスの図書館に購入、改めて敬意を表した次第である。他方、上記の中国研究書の基礎となった碩学の遺著『支那旅行日記』上巻（海老原正雄訳、慶応出版社）が 1943 年に和訳初版として出版され、これらの書物は学生時代から折に触れて再読していた。

その本の書き出しの部分で、1868 年カリフォルニアでシナ帝国の地質学的調査行きを決意した経緯が書かれている。こうして同年 8 月 3 日には日本号に乗船、8 月 26 日にはシナへの途中で懐かしい横浜に上陸した。1860 年から 61 年にかけて、彼が始めて日本を訪れた時には、横浜には僅かの家しかなかったが、全ての日本人が率直、誠実で、土地もまた文明の祝福に禍いされていなかった。しかし、7 年後の横浜を見て、これほど粗悪に建てられた新しい都市を見たことがないと慨嘆している。その一方で、9 月 1 日には瀬戸内海をパラダイスと美文調で讃えながらも、文明と欲望が自然美の最大の敵であると警告することを忘れなかった。

その後、中国調査を一時中断して、1870～71 年にかけて日本列島を横断した詳細な旅行記と、1860～61 年に江戸と横浜に滞在した日記を合わせた記録を、上村直己先生（熊本大学名誉教授）が 2013 年に完訳され、リヒトホーヘンの優れた世界的比較眼と丹念な記録を通して、幕末と明治維新直後の日本人の生活、文化、考え方、そして美しい自然景観を、本書によって追体験できるのは幸甚である。このたび、国内外の教育機関で、学校経営、地理教育、国際会議と国際交流に貢献した畏友久保田武特任教授による本書の比較文化論的紹介もこよなき伴侶となる。

愚生はボン大学で 2 年間（1955~57）リヒトホーヘンより数代後の後継者に相応しい偉大な C. トロール先生（リヒトホーヘン・コロキウムも主催）に師事してきたのに、始祖の伝記的紹介を怠ってきた。それだけになお一層、上記両学友（上村、久保田両氏）に深甚なる謝意を表したい。